



優秀賞

書評 福岡伸一著『生物と無生物のあいだ』（講談社現代新書 2007）
（生田開架：460.4/129/S）

文学部 4年 羽生真志

「私たちは、自然の流れの前に跪く以外に、そして生命のありようをただ記述すること以外に、なすすべはないのである。」(P285)

生物には時間がある。そしてその内部には常に不可逆的な時間の流れがあり、その流れに沿って折りたたまれ、一度折りたたんだら二度と解くことはできない。それが生物という存在の一種の定義である。不可逆的なシステムの中で、常に全体のバランスを保った平衡状態を作り出すこと、それが生物の生命活動であり、ユダヤ人の科学者、ルドルフ・シェーンハイマーが「動的平衡」と呼んだそのメカニズムは、生物と無生物を区別しうる指標であるとともに、「命とは何か」という問いに接近しうる一つの大きな論点でもある。

本書「生物と無生物のあいだ」は、分子生物学者である福岡伸一が上記「動的平衡」論をもとに生命の本質に接近しようと自らの研究人生を綴ったものである。詳細は伏せておけるが、分子生物学の発展を、ワトソンやクリック、シュレーディンガーなどの有名な研究者の人格や研究態度にも触れつつ初心者でも入りやすい流麗かつ愉快的語り口で説明し、自らの研究での発見で締めくくっているのが大まかな流れである。特に「二重らせん」理論の前史とその後の展開の話は、この分野の初学者を一気に引き込む力を持っている。ある章ではルポライターの記事、ある章では旅行記、ある章では自伝的なエッセイのようにみえる本書の語り口からは筆者の類い稀なる文章力を垣間見ることができ、その巧みな描写力から投影される日本やニューヨークの風景は、普段私たちが見ているのとは全く違う、分子生物学者独自の視点を読者に疑似体験させる。砂浜に転がる貝殻が放つ硬質な光から DNA がもたらす美の形式、秩序がもたらす美しさを見出すその視点は、少なくともこの分野の門外漢である私にとっては非常に新鮮であり、その体験はこの本の魅力の一つである。

冒頭で引用した文章のように、本書後半では生命の内部の不可逆的な時間の流れと、その中で生へ向かって動き続ける細胞の働きについて詳細に記述されている。その様は、鴨長明が方丈記に記した、「ゆく河のながれは絶えずして、しかも、もとの水にあらず。よどみに浮かぶうたかたは、かつ消え、かつむすびて、久しくとどまりたるためしなし。世の中にある人と栖（すみか）と、またかくのごとし。」という文章を私に思い出させた。一見、固定的な構造に見える骨や歯ですらもその内部では絶え間のない分解と構成が繰り返されているという事実は、生命の動的な流れを意識し、この世の「生物」へ対する見方を変えるのに十分なものであった。

本書はこの分野の専門家にはやや易しいかもしれないが、それ以外の方にはぜひ一読してもらいたい。そうすれば、本書に込められた「生命の躍動」が必ず読者の内に響くことだろう。生命の美しさを知ることは、生命であふれた世界の美しさを知ることにもつながるのである。